

シンポジウム

論題：アナロジアの問題

司会 稲垣良典

中世哲学会のシンポジウムにおける司会者の役割についてどう理解したらよいのだろうか。中世の大学の討論 (disputatio) における教授 (magister) に自らをなぞらえることができないのはいうまでもないであろう。司会者にはそれほどの権限も責任もゆだねられていない。したがって中世の大学の教授が討論につづいて行うように義務づけられていた総括 (determinatio) をここでやる必要はない。しかし他方、司会者はたんなる進行係や場内整理係たることにとどまるべきでもないであろう。かれはそのような外的な秩序 (ordo) よりむしろ、討論の内的な秩序や統一について配慮しなければならない。ではそこで配慮されるべき内的秩序とはいったいなにか。それはシンポジウムの目的からして定まってくるであろう。

シンポジウムの目的は——そして、これは学会の全体についてもいえると思うが——ディアレクティケーによる真理の探求であるにちがいない。したがって司会者にとっての課題は、シンポジウムにおけるすべての発言が真のディアレクティケーをめざすものであるように配慮することであるといえよう。すくなくともシンポジウムの全体を通じて探求という性格が失われないように配慮しなければならない。もしそのことがなんらかの理由で不可能となったら、そのときにはシンポジウムにかわる別の形式を考案しなければならないであろう。

つぎに「アナロジアの問題」を主題としてとりあげた今回のシンポジウムについて、それを参加者による共同の探求と見た上で、二、三のことを覚え書きふうに記載してみたい。まずこの主題がとりあげられた理由は、これまでこの問題について中世哲学会の会員が発表した論文がかなりの数にのぼっており、したがって会員によ

る積極的な参加が期待できること、さいきん宗教哲学の分野で宗教的認識、宗教言語の問題に関連して中世のアナロジア理論があらたに哲学的関心を呼びおこしていること、などであった。「いまさら」アナロジアの問題を、と感じた人々もあるかもしれない。たしかにアナロジア、とくに比喩的ならぬ、厳密な比例性 (proportionalitas) のアナロジアをもって、トマス形而上学の理解の鍵とした時代は半世紀も前に終わったかもしれない。しかし、ペレス教授が指摘されているように、トマスのアナロジア思想についてはその後も注目すべき歴史的、体系的研究が数多く発表されているのであって、とりあげるべき問題に不足することは決してない。また比例性のアナロジアについても、シンポジウムにおける松本教授や牛田助教授の質問があきらかにしたように、トマス解釈の問題とはべつに、形而上学的認識の形式あるいは方法としてその有効性を検討する、という問題が残っている。

さらに当初の計画のうちに入っていながら今回のシンポジウムでは、じっさいにはとりあげられなかった、もう一つの重要な問題がある。それはプロテスタント神学者、とくにカール・バルトによる「存在の類比」(analogia entis) の批判と、「信仰の類比」(analogia fidei) の主張であり、これを予定通りとりあげることができていたら、中世(とくにトマス)のアナロジア理論の厳密な理解をこころみるためのよい機会になったのではないかと思われる。ついでにのべると、プラグマティズムに関する優れた研究を発表し、宗教哲学の分野においても注目すべき発言を行っているエール大学の J. E. スミス教授は「経験の類比」(analogia experientiae) を提唱しているが、いわゆる経験主義と合理主義の区別をこえて、近代哲学を特徴づける基本的な観念は「経験」(「存在」ではなく)であるという解釈がなほどこかの根柢を有するとしたら、「経験の類比」は近代哲学の自己理解あるいは自己批判のこころみとして、重要な問題を提起しているように思われる。

アナロジアの問題への接近方法がいろいろあるなかで、そのどれをとりあげるか、会員のだれに報告を依頼するか、などの問題は、山田教授を中心に京都地区の委員、幹事の努力によって決定された。司会者として受けた勲象を率直にいうと、三つの報告は事前に詳しい連絡や調整がなされなかったにもかかわらず、中世のアナロジア理論の共同的な探求として不思議なほど相互に補足しあい、統一的な全体をかた

ちづくっていたように思う。すなわち、大鹿助教授は中世のアナロギア・エンティスの理論と、そのギリシア的源泉としてふつうに指摘されるものとの間の違いを率直に、鋭く指摘されたが、ペレス教授もトマスのアナロギア理論とギリシア哲学との間の「繋がり」に関する問題点にふれておられ（「トマスの使うアナロギアというラテン語はギリシア語のアナロギアと比べてその意味がもっと広く、このアナロギア論のもっとも重大な点は、ギリシア哲学ではアナロギアと呼ばれていなかった学説と関連している。どうしてもとの語の意味がこのように拡張されるようになったかはまだ十分わかっていない問題である。」……レジメからの引用）、これを受けて今道教授は中世哲学の基本的な性格の一つに目をむけることによって（それは見えざるものへの憧れからして営まれる哲学であり、見えざるものとの合一による人格の完成をあくまでめざしてゆく希望の哲学として規定されている）、このような言葉の意味の拡大、裏からいえば中世アナロギア理論の成立、を理解するための道を示唆された。

アナロギアという言葉、およびその思想のなんらかの側面がギリシア哲学にさかのぼることは否定すべくもないが、同時に、中世のアナロギア理論が教父たちからうけつがれ、長い年月の間に高度の洗練に達した聖書解釈をはなれては成立しえなかったことは当然推察されるころであろう。しかしわれわれはこの当然すぎることにたいして、それにふさわしい注意をはらっていないことが多く、その点、今道教授の指摘はきわめて貴重なものであった。この点に注意をむけることは、アナロギアを「存在の絆」と解し、もっぱら諸々のカテゴリーの間、あるいは創造主と被造物との間の連続性や類似を指示するものとする立場の一面性からわれわれを救ってくれるであろう。アナロギアはそれと同時に、あるいはむしろ、それよりもさきに創造主と被造物との間の非類似と非連続—否定神学—をわれわれに想起させるものである。そこからさらにひるがえって非連続なものの連続をわれわれが肯定するにいたるとき、われわれの思考の地平はすでに、純粋な存在のアナロギアから信仰のアナロギアへ、恩寵の世界へと移っているというべきであろう。

松本教授も質問において、スコラのアナロギア理論、とくに神と被造物との間のアナロギアにおける非連続の問題にふれられた。それは、結果たる被造物から出発してア・ポステリオリに原因なる神の認識へと到りつくという道程を認めた上で、

神の絶対的な超越性はどのようにして保証されるかという問題である。松本教授によると、神と被造物との間のアナロジアを因果性とか分有の観点から捉えようとすると、どうしてもその間に直接の比例を認めることになり、神の超越性は保証されない。これにたいして比例性のアナロジアにおいては、直接的な比例は神、被造物それぞれの項の内部においてのみ認められているにとどまり、神と被造物との間に直接的な比例関係は措定されることはないので、前述の難点を免れることができるといわれる。

このような松本教授の、経験論的形而上学の立場を予想する問題提起は、今回のシンポジウムでは十分に討論が深められないままに終わった。おそらく、比例もしくは帰属のアナロジアを基本的なものとする立場からは、つぎのような応答がなされるであろう。神を被造物において見出される完全性一たとえば存在や善一の原因と解するにとどまった場合、原因たる神についてはいまだなんらの実質的な言明もなされていたことにはならず、したがって不可知論に陥る危険がある。じつはこれを救うのが、原因たる神と結果たる被造物との間に類似の比例的構造があることを主張する比例性のアナロジアである。したがって、帰属もしくは比例のアナロジアによっては神の絶対的な超越性が保証されないどころか、基本的にはこのアナロジアこそ神の超越性を主張するものであることになる。これら二つの対立的な議論は、しかしながらこのままでは互いにかみ合わず、すれ違いに終らざるをえないであろう。その理由はそれぞれの場合においてアナロジアの捉え方が異っている、というところに見出されるであろう。

じつは、つぎの牛田助教授と報告者との間の質疑応答を通じてうかびあがってきた論点の一つが上述の問題であった。すなわち、牛田氏は質問の前提として四項式アナロジア（比例性のアナロジア）の方が二項式（比例もしくは帰属のアナロジア）よりも形而上学的認識の方法として有効である、という基本的な立場をとっておられるが、じつはこの基本的な立場そのものがアナロジア理論においては問題にならざるをえないのではないか。ここで、大鹿助教授がプラトンとアリストテレスにおけるアナロジア論を比較して、「プラトンにおいては、多項間に比例関係の存在すること自体が強調され……アリストテレスにおいては、これにたいして……一種の論理的推論にも似た機能が……」強調されていることを指摘されたことの重要さが

思いおこされる。すなわち、認識方法としての有効性の見地からアナロギアの異った形式の優劣、先後関係について論ずるのに先立って、そもそもアナロギア理論はなによりも先に（形而上学的）認識方法あるいは推論方法であるのか、それともすでに遂行された認識の論理的構造に関する理論なのかが問われなければならないであろう。これは存在のアナロギアと名辞のアナロギアとの関係、ひいては存在論と論理学との関係や、本質と存在についてどのように考えるか、などの問題を呼びおこすであろう。かりに、アナロギアを認識の方法としてではなく、認識の論理構造に関する理論と見た場合には、比例とか比例性の問題よりは、*per prius et posterius* の問題、および *res significata* と *modus significandi* の区別の問題などがより中心的な位置をしめてくるように思われる。いずれにせよ、アナロギアの問題は、カエタヌスによって定式化されたアナロギアのいくつかの形式について論ずるだけではゆきつまらざるをえないことが今回のシンポジウムにおいてあきらかにされたといえるのではなかろうか。

提題　　プラトンとアリストテレスにおけるアナロギア

大 鹿 一 正

I　まずはじめに、プラトンとアリストテレスの哲学において、アナロギアの理論がどのように取り入れられているかを考察し、次に、所謂中世のアナロギア・エンティスの理論がそれらとどのような関係にあるかを見ることをもって、今回の私への課題の応えとしたい。

一般に、アナロギアすなわち比例についてもその発見はピュタゴラスに帰せられているが、その後、しかもまだ早い時期にピュタゴラス学派においてその理論は発展させられて、プラトン、アリストテレスの時代には、諸種の中項をもつ数列の研究と相俟って相当完成した数学の一分野として学ばれていたようである。従って、⁽¹⁾数学好きのプラトンは勿論、アリストテレスもアカデメイアの一員として当然これら比例の理論に通じていたであろうことは推測されるところであるが、事実、両者